

<「知るっぱ！久留米」 令和4年3月17日(木) 12:30~放送分>

## 鳥類センターの魅力 ～第3回～ 「飼育員のひみつの話」

<ゲスト：久留米市鳥類センター 高山しのぶさん>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっぱ久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

今月は、久留米市の人気スポット『鳥類センターの魅力』をテーマにお送りしています。

ゲストはこの方です。

ゲスト:高山さん(以下「高山」)

こんにちは!久留米市鳥類センターの高山しのぶです。よろしくお願いします。

坂本 3回目の今回は、『飼育員のひみつの話』というテーマです。

高山さんは広報のご担当ということですが、飼育員もなさってるんですか?

高山 飼育員は、過去にしておりました。

坂本 まず、飼育員にはどうやってなるんですか?

みなさん動物がお好きなんでしょうけどね。

高山 「動物が好き」というのが第一ですが、資格を持っていなくても飼育員になることはできます。

一方で、「動物が好き」という気持ちだけでは務まらない、動物たちの命を預かる大変な仕事です。

坂本 なるほど。好きだけじゃダメということですね。何の知識もないじゃあね。

高山 資格の話をする、必要な実務経験を経て、

「日本動物園水族館協会」が認定している「飼育技師」試験を受験することができます。

合格すると「飼育技師」の資格を得られます。

動物園運営に必要な「動物取扱責任者」の要件にしているところもあります。

坂本 資格がなくてもできるけど、正式な認定もあるということですね。

下積みがあって、その経験の上に資格を取るということですかね。

高山 ちなみに、一番飼育経験の長い飼育員は、飼育歴15年以上のベテランさんです。

20代から70代までの幅広い年代が揃っていて、

毎日交代で、当たり前ですが365日休みなく動物たちのお世話をしていますよ。

坂本 確かに、鳥さん達には土日なんてありませんからね。大変な仕事だと思います。  
今から、人と鳥たちとのエピソードを伺っていきます。  
高山さんは、どんなお話が印象に残っていますか？

高山 鳥類センターにいる動物たちは、人間と同じように個性豊かで、いろんな飼育員との話があります。  
「アムロ」という人工飼育で育ったオスのペンギンがいます。  
親代わりとなって世話をしていた飼育員が、部屋の掃除にやって来ると、  
そばにやって来て「遊ぼうよ」と離れません。  
交代勤務なので、いろんな飼育員が来るんですが、  
その人が勤務の時だけは、いつもべったりなんですね。  
掃除をする時も関係なく引っ付いているのを見かけますが、  
毎回そんな感じとのことで、飼育員はなかなか大変そうです。

坂本 アムロ、ガンダムに出てきそうな名前ですね。(笑)  
「親父にもぶたれたことがない」なんては言わないでしようが、  
甘えん坊なペンギンってかわいいでしょね。なんだかとっても和みました。  
一方で、テレビ番組でもよく取り上げられる危険な鳥もいるそうですね。

高山 世界で一番危険な鳥と言われている、「ヒクイドリ」がいます。  
インドネシアやオーストラリアが原産で、体長約 170 センチメートル、体重約 50 キログラム、  
ダチョウの 2/3 ほどの大きさの飛べない鳥です。  
強い脚の力で、時速 50 キロで走ることができます。  
人に危害を加える恐れのある「特定動物」とされていて、飼育には自治体の許可が必要です。  
ゲージは二重扉にしないといけないですし、脱走に備えて体にマイクロチップを埋めています。

坂本 とても大きいんですね。おまけに脚も速いとは、車みたいですね。  
特定動物というのが危険なニオイがしますね。  
マイクロチップを埋めているというのは、まさにリアル・ジュラシックパークですね。

高山 顔は鮮やかな青に首から垂れる鮮やかな赤の肉だれ、大きなトサカ、  
そして脚には鋭い爪を持った、見た目はまるで恐竜です。  
実は、比較的大人しい性格なんですよ。  
それでも、油断して危害を加えられることのないよう、機嫌が悪い時には飼育を後回しにしたり、  
餌を食べている隙を見て鳥舎に入ったりと、飼育員は常に動きを観察し、距離を取ります。  
テレビでよく紹介されるんですが、どういうわけか特定の人だけに鳴いたり、  
フェンス越しですが体当たりをして威嚇するんです。

坂本 肉だれっていうんですね。怖いけど面白そうな鳥ですね。  
名前はヒクイドリだけど、高い人気を誇っている・・・お後がよろしいようで。(笑)

ちなみにダチョウやエミュー、ヒクイドリが固まって展示していたり、  
鳥同士の相性なんかもあるんですか？

高山 観る方が観察しやすいように、例えば走鳥類、水鳥類、フクロウなどの猛禽（もうきん）類など、  
種別にまとまったエリアで展示するようにしています。  
人間同士でそりが合わない人がいるのと同じで、同じ動物種同士でも相性があります。  
例えば、強いものが弱いものを攻撃するなど、闘争が起こることがあります。  
そんな時は、別の場所で飼育をしたり、時には他園に引っ越してもらったりすることもあります。

坂本 鳥の気持ちになって展示されているんですね。  
そんな飼育員さんの愛を一身に受けて長生きした鳥がいて、話題になりましたよね。

高山 東京オリンピックの年、1964年にやって来て、2010年まで実に46年間も暮らした  
国内最長飼育のオオサイチョウのカンタです。  
人間の年齢に換算すると、120歳以上と考えられています。  
東南アジア原産の大型の鳥で、頭は黄色のヘルメットのような形をしたツノ、  
大きな黄色いくちばしがとってもおしゃれでした。

坂本 最長飼育で、名前がオオサイチョウという。(笑)  
たしか、ゲートに入ってすぐのところにいましたね。

高山 さすがですね。私でもわからないことをよくご存じで。  
なんと、私が幼稚園のころ、鳥類センターで描いたカンタの絵が、今も残っているんです。  
約20年ぶりの再会が、飼育員という形で実現するとは思ってもよらず、  
何か運命的なものを感じていました。  
でも、現実はそのドラマチックではなく、新人時代に頭をつつかれ、軽く血を流したこともありました。  
今では笑い話ですが。

坂本 なかなか話は尽きませんが、残念ながらお時間が来てしまいました。  
今回は、気持ちが温くなるような飼育員さんと鳥たちの話を伺ってきました。  
高山さん、貴重なお話をありがとうございました。  
次回は、『希少動物のひみつ』というテーマでお送りします。  
お楽しみに！